

# ロスタイム

作 鏡味富美子

登場人物

佐藤健三(七六)―主人公

ユウ(七〇)―健三の妻

研一(四二)―健三の長男

浩美(四〇)―健三の長女

りえ(二六)―健三の次女

ケン(二六)―若かりし健三

使者―黄泉の国からの使者

1 プロローグ

辺りを見回し誰かを待っている様子の健三(七六)。

健三「…遅いなあ」

ほんの少しうろろする健三。

健三「(気付いて)やあどうも皆さん…突然ですがあなたはどんな死を迎えたいですか？」

腰を下ろす健三。

健三「いずれ迎えるであろう死について考えることが度々ありました…いやー縁起でもないこと言いましたて申し訳ございません、けど人生何が起るかわからない、一カ月後いや明日死を迎えるかもしれない。だったら出来るだけいい気分で死にたい、たとえ身体の痛みはあっても心だけは穏やかで温かくって…幸い私は、多少苦しい思いもしましたが人生最良の死を迎えることが出来ました」

思いをはせる健三。

健三「ああ驚いた方もいらっしやるかもしれませんが、実は私死んでるんです」

辺りをきよろきよろと見回す健三。

健三(小声で)「ここだけの話なんです……いや、やっぱりいずれ皆  
さんも体験するんだから話さないことにします」

立ち去ろうとする健三。

健三「……でも心構えてって奴も必要ですから……ほんの少しだけお話  
しましょう(あれは五〇時間前のことでした……)」

暗転1。

## 2使者との出会い

横たわっている健三。

ファイルを手にした使者がやってくる。

使者「(合掌)」

健三「目を覚ます(ん?)」

使者「どうもこの度は(ご)愁傷様でございます」

健三「え?」

使者「(ファイルを開き咳払い)ええ佐藤健三さん七六歳、本日×月×

日午後一時八分(ご)臨終と……」

健三「(驚愕)ご、(ご)臨終って……私が?」

使者「はい、長い間(ご)苦勞様でした」

健三「死んだ……」

使者「驚かれるのも無理ありません」

健三「……」

使者「ではあまり時間が(ご)さいませんので、手短かに説明させていただ  
きます」

健三「?」

使者「只今よりあなた様のご葬儀まで、生きている間にやり残した事  
や整理したい事などをしていただく時間が与えられます」

健三「はあ……」

使者「まあ簡単に言えばサッカーのロスタイムみたいなものです」

健三「ロスタイム……」

使者「告別式が午前か午後によって若干時間は変わりますが今日が  
友引なので明日が通夜、明後日が告別式でざっと五〇時間前後  
つてところでしょうか」

健三「(困惑)あのお……」

使者「何か質問でも?」

健三「…私は、本当の本当に死んだんですか？」

使者「はい」

健三「(しょんぼり)…すべての人にロスタイムはあるんですか？」

使者「はい」

健三「(ますます困惑)けどそんな話聞いてませんし」

使者「まあ皆さん死んでからのことですからお聞きになることは無

理かと…」

健三「はあなるほど…でお宅は？」

使者「ああ申し遅れました…私は黄泉の国の使者でございます」

健三「黄泉の国？」

使者「まあ簡単に言えばあの世のことでございます」

健三「…」

使者「で、身体のほうはどういたしましたしょう」

健三「身体？」

使者「そのまま現世に戻られたら心霊現象になってしまいますので

別の身体をこちらで用意させていただきます」

健三「別の身体…」

使者「中には歴史上の人物や外国スターになりたいなんて方もいら

っしゃいますが、あまり有名人はお断りしております」

健三「(考え込む)」

使者「(時計を見る)」

健三「…」

健三の無言の間に痺れを切らす使者。

使者「分かりましたではアイダアキラさんにしておきましょう」

健三「アイダアキラさん？」

使者「身体リスト一番の方です」

健三「身体リスト一番って、そんな全然知らない人の身体なんて嫌で

すよ」

使者「でしたら若い頃のご自分に戻られる方も多いですけど…」

健三「えつもう一度、若い頃に戻れるんですか？」

使者「ええあなたの場合五〇時間前後ですが」

健三「じゃあ二六歳の身体に戻してください」

使者「(あつさりと)分かりました」

健三「どうしてだと思えます？」

使者「(ファイルに書き込む)さあ」

健三「知りたくありません？」

使者「別に」

健三「妻とはじめて出会った年なんですよ」

使者「そうですか」

思いをめぐらす健三。

健三「そうだ、通帳やら権利書の隠し場所子供たちに教えとかなきや」

使者「(はっとして)大切なことを言い忘れました」

健三「なにか?」

使者「ご自分の正体を絶対に明かさないこと」

健三「えっそれじゃあ思い出話もなにも出来ないじゃないですか」

使者「いいですか、あなたはもう現世に存在しないのですよ」

健三「でも少しくらいなら・・・」

使者「(首を横に振り)正体がばれた時点でロスタイムは打ち切り、それまでの記憶も消させていただきます」

健三「そんな」

ファイルから書類を出す使者。

使者「それとこれを、よく読んでおいてください」

健三「なんですか?」

使者「二六歳の若者らしい振る舞いができる、マニュアルです」

健三「それはご親切に」

使者「では次に行かなければなりませんので私はこれで」

健三「忙しいんですね」

使者「ええ季節の変わりめは特に忙しいのです」

健三「なるほど」

使者「くれぐれもばれる事のないよう」

健三「はい」

暗転2。

3ケンが来る

佐藤家居間、夕方。

健三の亡骸が白い布団に寝かされてある。

片隅で手提げ袋を大事そうに抱えているユウ(七〇)が空を見つめている。

浩美の声「ご苦労様でした、明日もよろしく願いますね」

研一(四二)がやってくる。

研一「(健三に)親父、やっと帰ってこられたな」

浩美(四〇)がやってくる。

研一「葬儀屋さんは？」

浩美「今帰った、明日の夕方納棺するって」

研一「そうか…(健三を見つめる)」

浩美「(健三を見て)しかし上手に詰め物してくれたわよね…とても死体には見えないわ」

研一「死体って…そうはつきり言うなよ」

浩美「あら、だって本当じゃない兄さんもそう思わない」

研一「そりゃそうだけど」

浩美「母さん、父さん帰って来たわよ」

ユウ「…」

浩美「母さんってば、明日の夕方には父さん棺おけに入れちゃうんだから、今のうちにお別れしとかなきゃ」

ユウ「…」

浩美「父さんよ、母さんの旦那さん」

ユウを健三のそばに連れてこようとする浩美。

ユウ「イヤ！イヤ！」

手提げ袋をぎゅっと抱きかかえるユウ。

浩美「ホラ…ねえ(ユウの手提げ袋に手が触れる)」

ユウ「ドロボー！ドロボー！」

浩美「なに言ってるの私よ、いくら母さんだからって言っていることと悪いこと…」

研一「よすんだ親父の名前すら分らないんだから」

浩美「(ため息)」

浩美が手を離すと再び空を見つめるユウ。

研一「それより、りえと連絡ついたのか？」

浩美「留守電に入れといたんだけど…いったいなにやってるのかし  
」

研一「…そうか」

浩美「昔から自分勝手な子だとは思ってたけど、父さんの死に目に立ち会わなかったなんて」

研一「事情があったんだろう」

浩美「事情って何よ……あの子の考えてること全然わかんない」

研一「(ため息)仕方ないさ一回り以上も年が離れてるんだから」

若き健三、ケン(二六)がやってくる。

ケン「ただいま!」

研一・浩美「???」

ケン「(しまった)ご、ごめんください」

浩美「あんた誰?勝手に上がって来てどういうつもり?」

ケン「す、済みません」

研一「あの、どちらさままで?」

浩美「なんか用?」

ケン「あの……その……」

困り果てるケンが、健三の亡骸を見つける。

ケン「お、お参りに……」

研一「お参り?」

浩美「父さんの知り合いなの?」

ケン「はあ、知り合いといえれば知り合いのような……はははっ」

疑う研一と浩美。

ユウ「健三さん!」

研一・浩美「?!」

ユウ「お帰りなさい、健三さん」

ケン「あ……ああ……」

浩美「なに言ってるの、母さんったら」

研一「(ケンに)済みませんウチの母親ちよつと……」

ケン「ああ大丈夫、慣れてますから」

研一「へ?」

ユウ「さあ今熱いお茶入れますから」

ケン「ああ、すまないね……」

ユウ「そうだおいしい羊羹もあるんですよ」

ケン「(困って)ああ……はははっ」

研一・浩美「?」

ユウ「さあ早く、早く」

無理やりケンを奥の部屋に連れて行くユウ。

ケン「ではお邪魔します」

あつけにとられる研一と浩美。

浩美「誰だろ？」

研一「さあ…けどお袋、妙になついていたよな」

浩美「私たちにはろくに口も利かないくせに」

研一「お袋の知り合い…いやでも親父の知り合いのようになって言つてたよな」

浩美「ええ…」

考える研一と浩美。

浩美「分かった、お母さんが時々通っているデイサービスのボランテ  
イアじゃない？」

研一「そうかそれで親父ともお袋とも顔見知りってわけか…お袋の  
ボケのこと慣れてますからって言つてたもんな」

浩美「ほらやつぱりそうだわ」

研一「わざわざ、親父のお参りに来てくれたのに悪いことしちゃった  
な」

ケンとユウの方を見る研一と浩美。

浩美「いきなり入ってきたんだもん仕方ないわよ」

研一「俺たちよりよっぽど心開いてたな、お袋」

浩美「そりゃ向こうはプロだから」

研一「でも他人なんだぜ、俺たちとの長い歴史はどうなっちゃったの  
かって思うとやりきれないよ」

浩美「私も年取ったらボケるのかしら…ああヤダヤダ」

研一「お前はボケないよきつと」

浩美「まくし立てる」あら、そう、どうして、根拠は？」

研一「べ、別に意味なんて…ただお前見たく計算高い奴はボケない  
かなあつて」

浩美「なにそれ嫌味？」

研一「首を横に振り）いや、頭の回転が速いってことだよ」

浩美「けど母さんだって教員だったのよ、頭の良さなんて関係ない  
わ」



研一「(独り言)計算高いと頭が良いは別なだけど……」  
浩美「え?」

研一「いや別に」  
浩美「そうだ……これから忙しくなるから彼にバイト料払って母さんの面倒見てもらうってのどうかしら」

研一「えつでも悪いだらういきなり……それにそんなこと引き受けてくれるかな」

浩美「大丈夫兄さん……世の中金よ、今の若い子が真剣に考えてるのはお金のことくらいよ」

研一「お前と違うって……でも通夜や告別式で弔問客とお袋の面倒はなあ……」

浩美「ね、私頼んでみるから」

干し柿の包みを手にしたりえ(二六)がやってくる。

りえ「干し柿を落とす」

研一「りえ!」

浩美「(ため息)」

りえ「(健三の遺体を見て呆然)」

浩美「父さん死んだわ……一時八分に」

りえ「……」

浩美「何回も電話したのよ」

りえ「……」

浩美「いったい何処いったの?」

りえ「……」

浩美「ねえ聞いているの?」

りえ「(ため息)……どこだっさいいでしょ」

浩美「なによその態度」

研一「まあまあ、りえも急でびっくりしてるんだよ……なっ」

りえ「……」

浩美「兄さんは黙ってて、この家が嫌いだかなんだか知らないけど自

分の父親が死んだのよ」

りえ「……」

浩美「あんた父さんが死んで悲しくないの?」

りえ「長引かずに済んで良かったじゃない」

浩美「な、なんですって?」

研一「りえ、自分がなに言ってるのかわかってんのか?」

りえ「兄さんたちだっけそう思ってるくせに」

研一「(悲しい)りえ」

浩美「(激怒)あんたっけ子は」

手を振り上げる浩美。

研一「浩美！」

りえ「叩けば」

浩美「・・・」

研一「やめるんだ浩美、りえを叩いたところでなんになるんだ・・・り

えも親父がそこに寝てるんだぞ」

浩美・りえ「健三の亡骸を見つめる」

振り上げた手を下ろす浩美。

浩美「苦笑」あーあ恥かしい、あんたみたいな非常識な妹・・・おまけ

にこんな年が離れちゃってさ」

りえ「激怒」それは私のせいじゃない！！」

ユウがやってくる。

ユウ「まあまあどうしたのそんな大きな声出して」

正気に戻ったのかと一回驚く。

ユウ「干し柿を見つけ）あら食べ物粗末にしちゃいけないわ」

手提げ袋に干し柿を仕舞うユウ。

ユウ「りえに）お帰りなさい、遅かったのね」

りえ「ごめん・・・ただいま」

ユウ「手洗いとうがいました？」

りえ「え？」

ユウ「帰ったらすぐに手洗いうがいでしょ・・・おやつ食べて宿題する

のよ、ランドセルはどうしたの？」

りえ「ため息」

研一「悲しく）お袋・・・」

ユウ「研一に）お宅どちらさん？」

研一「研一だよ」

ユウ「研一？」

研一「あなたの一番目の息子、佐藤研一です」

ユウ「哀れんで）あなたお里はどこ？」

研一「え？」

ユウ「ずっと帰ってないんでしょ、私の事をお母様と重ねていらっしやるようだけど……」

研一「……」

浩美「(大きなため息)」

浩美を見て敵意をあらわにするユウ。

ユウ「(浩美をにらむ)」

浩美「え？」

ユウ「あなたどういうつもりでいらしたんです？」

浩美「は？(困る)」

ユウ「(りえに)子供が聞くことじゃないわ、りえ奥に行ってらっしや  
い」

りえ「？」

ユウ「さあ早く、母さんの言うこと聞きなさい」

りえ「う、うん」

奥の部屋に行くりえ。

ユウ「主人にこれ以上近づかないでください」

浩美・研一「！？」

ユウ「あなたとは遊びだったんです」

浩美「(驚く)ど、どういうこと？」

研一「ドロボーの次は愛人か？」

浩美「なんでよ母さんったら……私に恨みでもあるの？」

ユウ「どうぞお引取りください」

浩美「ち、ちよっと待ってよ」

研一「お袋違うんだ」

ユウ「(研一に)あなたに母親呼ばわりされる筋合いはございません  
(浩美に)さあ帰って、帰ってください」

研一「誤解です、この人はあなたのご主人と何も関係ないんです」

ユウ「？」

研一「私の妹なんです」

ユウ「妹？」

りえが戻ってくる。

りえ「ねえ誰か奥で羊羹食べてる」

研一「ああ……親父の知り合い、いやお袋の知り合いか……」

りえ「え？」

研「お袋の通っているデイサービスボランティアの人  
りえ「ボランティア？」

いつの間にかケンも来ている。

ケン「えっボランティア！？」

浩美「あら違うの？」

ケン「い、いえそうなんです……よくご存知で」

ユウ「健三さん……」

りえ「え？」

研「親父と間違えてるんだ」

りえ「またずいぶん若い人と」

ケン「あはははあ……どうもそうみたいで」

ユウ「教えてください(浩美を指差し)この人だれ？」

ケン「浩美じゃないか」

浩美「よ、呼び捨てしないでよ」

ユウ「(悲しく)健三さんあなたやつぱり……」

ケン「(浩美に)す、済みません」

ユウ「この人とのこと認めるのね……(シクシク泣く)」

ケン「どういうこと？」

研「ああ、ややこしくなる一方だ！」

ユウ「(泣き喚く)バカ……健三さんのバカ、バカ……」

ケンを何回も叩くユウ。

ケン「えっなんで？」

研「親父の浮気相手と勘違いしてるんです」

ケン「はあ？」

研「済みませんが、お袋をなだめてやってくれませんか？」

ケン「ど、どうやって？」

研「こいつとは関係ない、愛してるのはお前だけだとか」

ケン「(照れて)そ、そんなこと言えるか(面等向かって)」

浩美「なに照れてんのよ、芝居よ」

ケン「……そうか」

泣き喚くユウに向かうケン。

ケン「ユウ私が愛した人は生涯おまえだけだよ」

ユウ「……健三さん」

ケン「(うなづく)」

研一「(感心)迫真の演技……」  
ケン「さあ、向こうへ行こう」  
ユウ「はい」

奥の部屋に向かうケンとユウ。

浩美「(ポツリと)浮気してたんだ、父さんも……」  
りえ「……も？」  
ケン「(びつくり)そんな事ない！」

一同ケンの反応に驚く。

ユウ「どうしたのお父さん？」  
ケン「イヤ、別に……」  
ユウ「お茶入れなおしましょうね、さあ行きましょう」

奥の部屋に行くケンとユウ。

研一「(ため息)お袋のボケ、かなり進んでるな」  
浩美「うん」  
研一「あのボランティアの人がいなかったらどうなったことやら」  
浩美「やっぱり入れるしかないわよ」  
りえ「入れる？」

研一「浩美とは何度か話し合ったんだけどお袋のこれからのことな  
んだけど……」

浩美「老人ホームに入れようと思うの」  
りえ「老人ホームって……お母さん納得してるの？」  
浩美「納得もなにもあんな状態だから仕方ないでしょ」  
りえ「でもそれじゃあ……第一この家はどうするの？」  
浩美「じゃありえがここに暮らして母さんの面倒見なさいよ」  
りえ「……」

浩美「ホラね……」  
研一「本来は長男の俺が面倒見るのが筋なんだろうけど……」  
浩美「駄目よ、嫁が嫌がるわよ、自分の親だってこんなにもめてるん  
だから他人の親の面倒が看られる訳ないじゃない」

研一「……」  
りえ「けど、ああいうところって凄くお金いるんでしょ」  
浩美「父さんの遺産と、この家を処分すれば大丈夫でしょ」

重苦しい気分のりえと研一。

浩美「ねえそれより気になってるんだけど、母さんがいつも持つてる手提げ袋やけに大事にしてない？」

研一「何だよ急に……」

浩美「通帳とか権利書持ち歩いてるんじゃないでしょうね」

研一「まさか……」

浩美「ウチの財産どのくらいあるんだろ……」

りえ「お金のことばかり」

浩美「独身気ままなあんたに何が分かるのよ」

りえ「独身が気ままだなんて決め付けないでよね」

浩美「なに言ってるのよ、父さんの死に目にも立ち会わなかったクセして」

りえ「!?!」

研一「浩美……」

浩美「この際だから言わしていただくけど、兄さんも聞いて」

研一「なんだよあらたまって」

浩美「遺産相続のことなんだけど……きつちり分配して欲しいの」

研一「まだ葬式も済んでないのにお前って奴は……それにお袋だって

生きてるんだぞ」

浩美「そんなこと言って兄さん独り占めするつもりなんでしょ」

研一「そんなわけないだろ」

浩美「そんなの信じられない、世の中信じられないことばかり……

信じて馬鹿を見るのは御免よ」

研一「どうしたんだ、なにかあったのか？」

ケンがやってくる。

ケン「いい加減にしなさい、奥の部屋にまる聞こえじゃないか」

研一「……」

浩美「関係のない方には黙っててもらいたいわ」

ケン「ユウさんにそんな話聞かせないでください」

浩美「いいのよ、どうせ母さんにはわかりやしないから……」

ケン「ボケてしまったら厄介者ですか？あなたたちを産んでくれた

大切なお母さんじゃないですか」

気まずい兄妹。

浩美「……そうだ湯のみ出しとかなくっちゃ」

台所へ行く浩美。

研一「(ため息)お袋の様子見てくる」

奥の部屋に行く研一。

りえ「あーあなんでこうなっちゃうんだろ」

ケン「お久しぶりだな・・・」

りえ「は？」

ケン「あつ、いや・・・久しぶりにこの家に帰って来たんじゃないですか」

りえ「え、ええ・・・でもどうして？」

ケン「健三さんから聞いたんです」

りえ「そうなんですか」

会話がなくなりなんとなく気まずいケンとりえ。

ケン・りえ「(同時に)あのお・・・」

ケン「あつどうぞお先に」

りえ「いえ、あなたこそ」

ケン「いえいえ、りえさんこそ」

りえ「名前まで聞いてるんですね」

ケン「ああ・・・はい」

りえ「さつきはありがとうございました」

ケン「え？」

りえ「お母さんに、生涯愛したのはお前だけだった」

ケン「いえ、本当のことですから」

りえ「本当のこと？」

ケン「健三さんとユウさんのことですよ」

りえ「お芝居上手なんですね・・・本当の夫婦みたいだった」

ケン「あはは・・・」

りえ「(笑う)名前まだ聞いてませんでしたよね」

ケン「健三です」

りえ「健三？お父さんと(一緒だ・・・)」

ケン「いや、いや違います、け、け、ケン、ケン・・・」

りえ「ケンケン？」

ケン「ケンです」

りえ「(おかしく笑う)いくつですか？」

ケン「え？」

りえ「年です」

ケン「七六です」

りえ「七六？」

ケン「間違えました……二六です」

りえ「(またおかしい)二六？私と一緒にだ」

ケン「そうですね」

りえ「普段どんなことしてるの？」

ケン「どんなこと？」

りえ「ボランテニアとは別に何かしてるでしょ」

ケン「ああ……盆栽」

りえ「盆栽!？」

ケン「(しまった)……は分かりませんので、えーえー映画です」

りえ「映画の仕事？カッコいいな」

ケン「イヤ、ただの趣味です」

りえ「そう……最近どんなの観た？」

ケン「(困る)」

りえ「じゃ好きな女優さんは？」

ケン「(困り果てる)や、山本富士子」

りえ「誰それ？」

ケン「誰って……一九五〇年代、初代ミスユニバーズの……」

りえ「結構マニアックなんだ」

ケン「かなりヤバイ)はああ……」

汗を拭くケン。

りえ「(おどろく)どうしたの?」

ケン「ちよつと、暑くて……」

りえ「お水持ってこようか?」

ケン「ああお願いします」

台所に行くりえ。

ポケットからマニュアルを出して読み始めるケン。

ケン「ああ寿命が縮まった……もう死んでるか」

真剣にマニュアルを読むケン。

りえが水を持って戻ってくる。

りえ「はい、どうぞ」

ケン「済まないね(水を飲み干し)甘露甘露」

りえ「(笑って)おまじない?」

ケン「へ?」



りえ「あなた本当に二六なの？実は七六のお爺ちゃんだったりして」  
ケン「(まずい)な、なに言ってるんだよベイビー」  
りえ「ベイビー？」  
ケン「おいらの本当の趣味はデスコで踊り明かすことだぜ」  
りえ「(笑いをこらえて)デスコ」  
ケン「ああそうさベイビー」  
りえ「(笑って)ケンケンって面白い人だね」  
ケン「(気安く呼ぶんじゃねえ)」  
りえ「(笑い転げる)」  
ケン「あのおそんなにおかしいですか？」  
りえ「(笑いをこらえて)ごめんなさい」

血相をかえた使者が浮かび上がる。

ケン「(使者に)なんだか変なんですけど」  
りえ「別に变なんかじゃないわ」  
使者「この靈気より冷たい空気、遅かったか……」  
ケン「ええ？」  
りえ「やっぱり変か……お父さん死んだって言うのにな」  
使者「済みません、マニュアルの年号間違えてしまいました」  
ケン「酷い、あんまりだ、そりやないでしょ……」  
りえ「そう私は酷い娘なのよ」  
ケン「あつあなたじゃなく」  
りえ「いいのよ、だつて私お父さんのこと……」  
浩美の声「りえ、ちよつと手伝ってちょうだい」  
りえ「はーい、じゃまた後で」

台所へ行くりえ。

ケン「……」  
使者「誠に申し訳ございませんでした。」  
ケン「(心ここに在らず)……ああ……もういいんです」  
使者「どうかさいました？」  
ケン「あの子は、りえはあの後なんて言おうとしたんでしょか？」  
使者「？」  
ケン「私はお父さんのこと……」  
使者「お聞きになればいいじゃないですか」  
ケン「……なんだか怖いなあ」  
使者「怖い？」  
ケン「私とりえの心はいつからかすれ違ってしまつて……きっと私の

「こ」と良く思っていないんでしょう、だから……」

使者「聞くも聞かぬもあなた次第ですよ」

ケン「……」

使者「あなたのロスタイムですから」

ケン「私のロスタイム……」

暗転3。

佐藤家居間、夜。

兄妹が話し合いをしている。

浩美「仕方ないのよそれしか」

研一「そうだな……」

浩美「りえも文句ないわよね」

りえ「……」

浩美「じゃあ四九日が済み次第母さんを老人ホームに入れることに

して……早くこの家査定してもらわないと、兄さんにこの家の処

分は任せるから」

研一「ああ……」

浩美「で、残りは私たちで分けると……ああ、早く四九日済まないか

しら……」

研一「なあ、なんでそんな金が必要なんだ？」

浩美「いいでしょ別に」

研一「純一君は知ってるのか？」

浩美「あいつの話はしないで！」

研一「？」

浩美「(イラつく)なんだかこの部屋、冷えるわね」

研一「(健二の亡骸を見て)ドライアイスが入ってるから」

浩美「こんな所にいたら、風邪ひいちゃうわ」

部屋を出て行くこうとする浩美。

りえ「純一義兄さん浮気してるんでしょ」

浩美「なんでそれを？」

りえ「夕方の騒ぎのとき、父さんも浮気って……」

研一「本当なのか？」

浩美「(ため息)いざれ分かっちゃうだろうから……私、純一と別れる

つもりだから」

研一「別れるって、子供たちはどうするんだ」

浩美「もちろん引き取るわよ」

研一「引き取るって簡単に言うけど女手一つで子供を育てるのは並

大抵じゃないんだぞ」

浩美「…だからいるのよ、お金が」

研一「…」

浩美「遺産貰って、さっさと離婚してやるんだから」

研一「何があつたか知らないけど夫婦なんてもんはな、いい時もあれば悪いときもあるさ、もう一度考え直せないのか？」

浩美「首を横に振る」

研一「一生支えあう相手として選んだんだろ？」

浩美「苦笑」夫婦ってね、所詮他人なのよ」

研一「そりゃそうだけど…」

浩美「父さんと母さん見て御覧なさい、自分の旦那が死んだことも分からないのよ、どこが支え合ってるって言えるの」

研一「それは…」

りえ「私はそんなことないと思う、頭では分かっても何ていうのか長い間一緒にいた時間や空気そういうの感じてると思う」

浩美「あんたは結婚したことないからわかんないのよ」

りえ「わからないわよ、でもこんなにくさんの人の中からたった一人とめぐり会ったのよ、おまけに好きになって結婚までしたのに憎しみあって離婚しなきゃならないなんて」

浩美「もし純一と夫婦じゃなかったらいい友達になれたかも」

研一「俺は別れることなんてこれっぽっちも考えちゃいないけど…」

浩美の気持ち少しわかるかも」

浩美「あなたの理想をつぶすように悪いんだけど私は、母さんたちを見て共に年を重ねる事、ましてや愛情のない男と老いを迎えることに嫌悪感でいっぱいなの」

黙りこくってしまおう兄妹。

浩美「(欠伸)さてと、寝るとしようかな」

研一「そうだな…明日から忙しくなるし」

浩美「おやすみ」

居間を出て行く浩美。

研一「りえ、お前も早く休んだほうがいい」

りえ「…いいのかなこれで」

研一「浩美の事？…それともお袋のこと？」  
りえ「両方」

研一「そうだな…」

健三の亡骸を見つめる研一とりえ。

研一「親父、また明日な」  
りえ「……」

居間を出て行く研一とりえ。  
しばらくしてユウが一人湯たんぽと毛布を持って居間にや  
ってくる。

ユウ「健三さん、今夜は冷えますから……」

健三の亡骸に毛布を掛け足元に湯たんぽを入れてやるユウ。  
浩美が居間に戻ってくる。

浩美「携帯忘れ(ちゃったわ)……?」

物陰に隠れユウの様子をうかがう浩美。  
健三の亡骸の横に正座するユウ。

浩美「母さん?」

ユウ「不束者ですが、幾久しくよろしくお願いいたします」

浩美「……」

健三の布団にもぐりこむユウ。

浩美「!?!?」

その場に座り込み、涙する浩美。

浩美「声を殺して泣く」

暗転4。

#### 4 通夜

翌日、早朝。

ケンとユウが庭(縁側)で日向ぼっこをしている。

ユウ「深呼吸して)甘くて優しい香り……」

ケン「またこの季節が来たね」

ユウ「はい」

ケン「りえが生まれた年に植えたんだよな」

ユウ「ええ……りえも大好きでした金木犀」

ケン「小さくて可愛い花だ……葉っぱが多いからちよつと目立たないけどな」

ユウ「いいえ、たとえ目立たなくてもこの香りのおかげでどこにいても金木犀の存在は分かります」

ケン「そうだね……りえにもそんな女性になってもらいたい」

居間に研一がやってくる。

健三の亡骸を見ると毛布が掛けてある。

研一「？」

毛布をめくってみる研一。

研一「(驚き)あつ誰だ、こんなことしたヤツ」

りえが居間にやってくる。

りえ「どうかしたの？」

研一「親父の布団の中に湯たんぽが入ってるんだよ」

りえ「きつとお母さんだわ」

研一「全くドライアイス入れてる意味がないじゃないか」

浩美も居間にやってくる。

浩美「そう目くじら立てなくっても、傷みやしないわよ」

研一「傷むって、魚みたいな言い方するなよ」

浩美「(思い出し笑い)」

研一「りえ「？」」

浩美「ああ、今日純一会社終わったら来るって」

研一「そうか」

浩美「(鼻歌なんか歌って)」

りえ「姉さん、なんかあった？」

浩美「何も……」

研一「純一君に連絡したんだ」

浩美「ええ」

研一「……」

浩美「なによ？」

研「いや別に」

居間を出て行く浩美。

りえ「なんかあったね」

研「わかりやすいヤツだな」

りえ「ほんと・・・」

研「居間を出て行く。」

ふと庭(縁側)を見るりえ。

手提げ袋から干し柿を出すユウ。

ユウ「そうそう、この季節もう一つ忘れちゃいけないことがあるんじ

やないですか健三さん」

ケン「干し柿を受け取り干し柿、旭屋のだ：干し柿は旭屋が一番」

ユウ「りえも大好きでしたよね」

ケン「ああ、りえと一緒に、干し柿作ったこともあったっけ」

ユウ「ええ、りえ食べすぎでお腹壊しちゃって」

ケン「遠足に行けなかったんだよな」

ユウ「笑って」そうそう」

笑いあうケンとユウ。

りえがケンとユウの元へ来る。

りえ「おはよう：：楽しそうね」

ケン「ああ、りえさん」

ユウ「りえ、おはようございますでしょ」

りえ「はいはい」

ユウ「返事は一回」

りえ「はい」

ケン「りえさん大好物の干し柿、一緒にどうですか」

りえ「！」

ケン「どうかしました？」

りえ「：私ダメなの干し柿」

ケン「ダメって、子供の頃あんなに食べてたじゃないか」

りえ「そのせいで運動会出られなくなっちゃって、それ以来」

ケン「休んだのは遠足だよ」

りえ「運動会よ」

ケン「ユウに向かって」遠足だよな」

ユウ「ハイお父さん」

りえ「ケンケン、本人が運動会って言ってるのよ」  
ケン「：ユウさん、それじゃ二人で食べましょう」  
ユウ「はい、お茶入れますね」

庭から立ち去るケンとユウ。  
微笑みながら首を傾げるりえ。

暗転5。

読経が流れる。

佐藤家居間、お通夜のあと。

健三の布団が取り除かれ祭壇が組まれてある。

その前で喪服姿の浩美と研一、ユウとケンがそれぞれがくつろいでいる。ユウは通夜らしからぬ格好をしている。

浩美「お経長かったわね」

研一「ああ足しびれちゃったよ」

浩美「ああ疲れた：身内が亡くなると大変だって聞いてたけどこんなに変だったとは：」

研一「純一君は？」

浩美「子供つれて帰ってもらった：明日は朝から来るって言ったから」

研一「純一君と仲直りしたんだ」

浩美「まさか」

研一「えっ、そうなの？俺はてつきり：」

浩美「兄さんは甘いわ、そう簡単に仲直りできたら初めから離婚なんて考えたりしやしないわよ」

研一「そりゃそうだけど：今日だって普通の夫婦やってたからさ」

浩美「当たり前じゃない、親戚の前でそんなところ見せられるわけないじゃない」

研一「怖いな：女って」

浩美「ぼやぼやしていると、兄さんも：」

研一「やめてくれよ」

りえがビールを持ってやって来る。

りえ「(ビールを渡し)はいどうぞ」  
研一「お悪いな」

ビールを持ってケンの元へ行くりえ。

りえ「ケンケン、お疲れ様(ビールをケンのグラスに注ぐ)」

ケン「ありがとう」

りえ「ケンケンのおかげで助かったわ」

ケン「いや、どういたしまして」

浩美「母さん、何であんな格好してるんだろ」

研一「気に入ってるんじゃないのか……俺たちが小さい頃よく着てな  
かったか」

浩美「あれじゃ、私はボケてますって言ってるようなもんじゃない」

研一「昔のお袋は凜としてた」

浩美「厳しかったわよね」

研一「ああ人にも自分にも厳しい人だった」

浩美「悲しいね」

研一「……そうだな」

研一と浩美がユウを見るとうとうととしている。

浩美「母さん、布団敷くからそろそろ休もうか？」

ユウ「(浩美を見て)あら、あなた……？」

浩美「(またか)……私は家政婦です」

ユウ「あらそう、いつもご苦労様(うとうと)」

りえ「お母さん寝よう、明日もたくさん人が来て疲れちゃうから」

ユウ「りえ、九時には布団に入らなきゃダメよ。歯磨いた？」

りえ「はいはい」

ユウ「返事は？」

りえ「はい」

ケン「ユウさんお部屋に行きましょうか」

ユウ「ハイお父さん」

浩美「もう母さんったら……」

研一「(苦笑)」

奥の部屋に行くりえとケンとユウ。

浩美はビールやグラスを片付ける。

研一「今晩ろうそく絶やしちやいけないだよな」

浩美「らしいわね……けど大丈夫よ少しくらい」

研一「ダメだよ、守らなきゃ」

浩美「めんどくさい」

研一「仕方ないだろう親父のためなんだから……俺が先に見てるから

「一時間おきに交代だからな」

浩美「(ため息)」



台所に片付け物を持っていく浩美。  
健三の遺影を見つめる研一。

研一「親父……」

暗転6。

ユウが眠っている横でケンとりえが座っている。

りえ「ユウの顔を覗き込み）子供みたいな顔して……」

ユウが抱きかかえた手提げ袋を取ろうとするりえ。

ユウ「しっかりと抱きしめている」

りえ「（驚く）あれっ……何が入ってるのかしら？」

ケンと顔を見合わせて笑うりえ。

りえ「私ね子供の頃お母さんのこと嫌いだったの」

ケン「え？」

りえ「お父さんのことはもつと嫌いだったけど」

ケン「（シヨック）」

りえ「小学校の頃、親が学校に来るのが嫌で嫌で仕方なかった」

ケン「……」

りえ「ほら私、お母さんが四四のときの子でしょ」

ケン「（独り言）私は五〇……見劣りするわな」

りえ「大好きだった啓介君がこう言うの『お前んち祖父ちゃんと祖母

ちゃんが来てんだな』って」

けん「（落ち込む）」

りえ「小学生の頃はさすがに言えなかったけど中学に入ってから  
事故死した両親の代わりに祖父母に育てられてるってみんなに

言ってたの」

ケン「……すでにこの世に存在してなかったわけか」

りえ「酷いでしょ私」

ケン「いや……辛かったんだな」

りえ「……」

ケン「お父さんのことを嫌いなのは年をとってたからだ」

りえ「……それだけじゃない」

ケン「えっ……」

りえ「お母さんの話では小学校上がる前くらいまではお父さんだ  
ったんだって私」

ケン「そうだったな」

りえ「ん？」

ケン「・・・と健三さんが」

りえ「私ぜんぜん覚えてないの・・・お父さんが私のこと嫌ってるのはよくわかったんだけど」

ケン「え？」

りえ「私がお父さんのこと嫌ってたように、お父さんも私のこと嫌いだったのよ」

ケン「そんなことない！」

りえ「ケンケンには分からないかもしれないけど本当なのよ」

ケン「自分の娘が可愛くない親なんているわけないじゃないか」

りえ「音を横に振り）お父さんは私に甘えを許さなかった・・・手をつなごうとしたら振り払うような人だったから」

ケン「・・・それは」

りえ「中学高校とそりゃ口煩くって、やることなすこと反対されたわ」

ケン「・・・」

りえ「頼りだったお母さんも、お父さんの言うことには逆らえなくて兄さんや姉さんが家を出て行って息が詰まりそうだった」

ケン「それで家を出たんだ」

りえ「(うなずく)」

ケン「(寂しく)思いがすれ違っちゃったんだな」

りえ「？」

ケン「健三さん、君のこと本当に愛してた」

りえ「・・・」

ケン「手をつながなかったり甘やかさなかったのは、君に一日も早く大人になってもらいたかったから」

りえ「・・・」

ケン「体力の限界というか、君が独立するまで責任持てるか自信なくなっちゃたんだよな」

りえ「ウソ・・・」

ケン「案の定りえさんの花嫁姿も見ずこの世を去ってしまった」

りえ「そうかしら・・・」

ケン「ああ、今のはすべて健三さんの言葉、足りなかったね言葉が・・・」

りえ「・・・生きてる間に話してみればよかった」

ケン「この家に生まれたこと後悔してる？」

りえ「そう思った時期もあったけど今は違う・・・この家に帰りたいかつたずつと」

ケン「じゃあ帰っておいでよ」

りえ「もう遅いわ……いまさらどの面下げて帰ってこればいいのか」  
ケン「遅くないさ」

りえ「首を横に振り」お父さんにも、お母さんにも何にもしてあげられなかった……お父さんの死に目に会えなかったこと一生後悔すると思う」

ケン「そんな……」

りえ「よくよく縁がないのよね、干し柿に」

ケン「干し柿……干し柿ってあの旭屋の？」

りえ「旭屋知ってんの？」

ケン「干し柿は旭屋が一番！」

りえ「(びっくり)それ、お父さんの口癖」

ケン「あはははあ……」

りえ「お父さん干し柿大好きでね、子供の頃一緒に作ったこともあるのよ。最後に香りだけでも……でも間に合わなかった」

ケン「(感激)りえ……」

思わずりえを抱きしめてしまうケン。

りえ「ケ、ケンケン……」

ケン「(はっとして)いや、そういうんじゃない……」

りえ「？」

ケン「(焦る)その、男としてじゃなく親として」

りえ「親？」

ケン「健三さんの気持ちになったら」

りえ「(寂しく笑う)」

ケン「りえさんの思い、健三さんに伝わってるから」

りえ「そうかな……」

ケン「(強くうなずいて)間違いなく伝わってる」

りえ「……お父さん」

ケン「ん？」

りえ「気使って返事しなくていいの」

ケン「ははは……そうだね」

ケンを見つめるりえ、ケンの肩に身を預ける。

ケン「(どぎまぎ)」

りえ「少しだけこうさせて……」

そつとりえの肩に手を回すケン、お互い癒されている。  
突然のホイッスル、ケンだけが驚く。

ケン「!?!」  
りえ「ど、どうかした?」  
ケン「いやべつに」

思いもよらぬところから使者が浮かび上がり、再びホイッスルを吹いて、りえから離れると言わんばかりにシッシツと手を払う。

使者「それイエローカード」  
ケン「で、でも」

使者「いいですか、あなたはもうこの世の人間じゃないんですよ」  
ケン「もう限界だよ……」  
りえ「え?」

使者「初めに約束したではありませんか」  
ケン「少しくらい、いいだろ」

りえ「(恥かしげに)でも、ケンケン……」  
使者「仕方ありません、ロスタイムは終了です」

ケン「そ、そんなこと言わないで……今夜だけ頼むよ二人で持てる最後の思い出に」

りえ「わかったわ……ケンケン悪い人じゃなさそうだから」

おもむろに、上着を脱ぎ始めるりえ。  
驚く使者。

使者「あつ、あらら……」

ケン「(慌てふためく)イヤ、イヤ、そ、そりやまずい駄目だ」

りえ「いいのよ、私だってケンケンのこと嫌いじゃないし……」

ケン「でも、それは……」

ブラウスのボタンに手をかける。

ケン「(使者に)何とかしてください」

使者「(知るもんかと背を向ける)」

りえ「どうしたの?」

ケン「(逆上)君!君は会って間もない男に、こ、こんなことをするか?」

りえ「(失礼な)はあ?誘ってきたのはそっちでしょ!」

ケン「いやそれは……」

慌てて、上着を着るりえ。  
それを見て安心する使者は片隅で腰を下ろす。

りえ「(怒って)信じられない」  
ケン「ごめん」

りえ「ケンケンはいいい人だと思うけど、女心ちつとも分かってないんだから」

ケン「本当にごめん」

りえ「謝らないでよ、余計惨めになるじゃない」

使者「あと一〇時間大丈夫でしょうね」

ケン「…あと一〇時間」

りえ「え？」

ケン「告別式まであと一〇時間」

りえ「…そうね、それがどうかしたの？」

ケン「(ため息)」

りえ「？」

ケン「お別れだね…いよいよお父さんと」

りえ「…うん」

ケン「(思いをめぐらす)」

りえ「ケンケンともお別れなの？」

ケン「ああ」

りえ「もう会えないの？」

ケン「どうかな…」

りえ「この家もなくなっちゃうみたいだし、これからどうなっちゃうんだろ」

ケン「やっぱりユウさんは老人ホームに行くんですか」

りえ「…」

ケン「思い出のいっぱい詰まったこの家がなくなったら寂しいでし

ょうね…」

りえ「お母さんの頭の中が真っ白でよかった…何も分からないままの方が辛くないから」

ケン「ユウさんは分かっていますよ」

りえ「(首を横に振り)自分の子供のことすら忘れてるのよ…兄さん

はよその人、姉さんなんてドロボーで愛人よ」

ユウ「(寝言)いつも…りえがお世話になってます」  
りえ「！」

驚くりえ、寝ているユウの顔を見つめる。

りえ「お母さん…」

ケン「微笑み強くうなづく」  
りえ「ごめんね、お母さん……何にも分かってないのは私の方だった。  
一緒にいよう、ずっと一緒にいよう……(ケンに)私、兄さんたち  
に話してみる」

ケン「涙ぐむ」  
りえ「どうしたのケンケン？」  
ケン「いや、ありがとう……ありがとうって健三さんが  
りえ「うん」

部屋を出て行くりえ。

使者「ため息」よかったですね」  
ケン「済みません、ご心配おかけしました」  
使者「最後まで気を抜かないでくださいよ」  
ケン「はい……切ないですね、こんなそばにいるのに父親だって名乗  
ってやれないの」

使者「……」

ケン「ああ大丈夫ですよ、正体を明かしたりしませんので」  
使者「では、明日お迎えに上がります」

使者が立ち去ろうとする。

使者「……コレ独り言なんです、手紙を書いたらいいな」  
ケン「手紙……そうか」

暗転7。

居間で研一が横になってうたた寝している。

りえが浩美を連れて居間にやってくる。

浩美「なによ話って、明日じゃ駄目なの？」

りえ「兄さん、兄さんってば」

研一「んっーん……勘弁してくれよ」

りえ「ねえ聞いて、私、この家でお母さんと暮らそうと思うの」

研一「浩美「えっ!?!」」

りえ「駄目かな？」

研一「ここで暮らすってことは、お袋の面倒看るってことだぞ」

りえ「うん」

浩美「本気なの？」

りえ「うなづく」

浩美「今はまだいいけど、この先どんどんボケが進んで、下の世話だ

ってしなくちやいけなくなるかもよ」

研一「無理だよ、一時的な感情でそんなこと……」

りえ「だってこのままじゃ、この家もなくなってしまうよ」

浩美「……」

りえ「そんなの嫌なの……この家がなくなるのも、この家に母さんがいなくなるのも」

研一「俺だって嫌だよ、でもな冷たい言い方かもしれないが俺たちが普通の生活できなくなっちゃうんだよ……りえだって、これから結婚もするだろうし母親にだってならなきゃならないんだ」

りえ「じゃあお母さんの残りの人生はどうだっていいの？」

研一「仕方ないんだよ、人はみんな年とるんだ、老いからは絶対に逃れられない……悲しいけど」

浩美「決心は固いのね」

りえ「はい」

研一「浩美？」

浩美「年とること悲しいなんて言っちゃいけないわ、兄さん」

研一「お前だって昨日ボケるの嫌だって言ってたじゃないか」

浩美「ああ……それ、撤回するわ」

研一「へ？」

浩美「ボケたらこっちのものよ」

研一「りえ」？」

浩美「母さん見て思ったの、長い間ずっと良妻賢母で教師の鏡、いい人続けてきたのよ、最後までいい好きにやらせてあげようよ……今の母さんなんだかとっても可愛いらしいじゃない」

研一「浩美お前……」

浩美「昨日はああ言ったけど、りえが言い出してくれてよかった……」

私も母さんにこの家についてもらいたい」

りえ「姉さん！」

浩美「うん」

肩を寄せ合う浩美とりえ。

浩美「私も絶対ボケて、純一にオシメ取り返させるんだから」

りえ「もう姉さんったら」

研一「……なんだか俺だけ鬼みたいじゃないか」

りえ「そんなことないよ……兄さんは私のこと本気で心配してくれた

んだもの」

研一「本当にいいんだな？」

りえ「うん」

浩美「私も覚悟決めたわ」  
研一「わかった、じゃあ皆でやろう」  
りえ「ありがとう兄さん」  
浩美「しっかりしてよ、佐藤家の長男」  
研一「おお」

笑いあう兄妹。

ユウがやってくる。

りえ「あれ、お母さんおトイレ？」  
ユウ「…」

いきなり祭壇のロウソクを吹き消すユウ。  
暗転8。

りえの声「ああっお母さんったらもう」

### 5 告別式

佐藤家居間、翌日朝。

居間の祭壇の前で座っているユウとケン。

ケン「今日はいいいお天気だね」

ユウ「そうですね、健三さん」

ケン「服、着替えたほうがいいんじゃないか？」

ユウ「あら、どうしてですか？」

ケン「お葬式にその服はちよつと…」

ユウ「お葬式、誰の？」

ケン「…」

ユウ「あらお饅頭だわ、お茶入れましょうね」

祭壇から饅頭を手に取りケンに渡すユウ。

ケン「独り言子供たちには手紙を書いたが…」

ユウ「(お茶を入れている)」

ケン「ユウ、今までありがとう」

ユウ「ハイ、どういたしまして」

まるで分かっていないユウ。



ケン「ユウ、その手提げ袋なに入ってるのかね？」

ユウ（微笑み）「私の宝物」

ケン「宝物？」

ユウ（うなづく）「

ケン「何だろう、見てみたいな」

ユウ「恥かしいわ」

ケン「恥かしい？」

ユウがおもむろに手提げ袋から一枚の写真を取り出す。

ユウ「これ(写真を渡す)」

ケン(受け取り)「こっ、コレは……」

ユウ「あんまり素敵だから」

ケン「懐かしいな(考えて)四五年前か」

ユウ「四五年前だなんて、一昨日撮ったばかりじゃありませんか」

ケン「……ああ、そうだったね」

再び写真を見るケン。

使者が浮かび上がる。

使者「おはようございます」

ケン「……おはようございます」

使者「……」

ケン「もう時間なんですわね」

使者「ええ……まあ」

ケン「昨日はありがとうございました……おかげで手紙を書くことが

出来ました」

使者「私は別に何も……」

ケン「もう思い残す事はありません……子供たちの事は」

空を見つめるユウを不安げに見るケン。

使者「……」

ケン「こんな事だったら毎日お礼を言っておけばよかった」

使者「お礼？」

ケン「うまい飯を作ってくれてありがとう……ノリのきいたワイシヤ

ツありがとう……子供の面倒ありがとう……励ましてくれてあり

がとう……いつも綺麗でありがとう……結婚してくれてありがと

う……同じ時代に生まれてくれてありがとう……」

使者「……」

ケン「本当に大事なものは失くしてみないと分からないんですね」  
使者「考える」

使者がユウに向かって手をかざす。

ユウ「どなたですか？」

ケン「(ユウを見る)え?」

使者「さっ、お別れをなさい」

ユウ「驚いて)け、健三さん…どうして若返ってるの?」

ケン「ユウ、わかるのかい?」

ユウ「ええ…」

ケン「ユウありがとう」

持っていた写真をユウに返すケン。

ケン「お前と一緒になれて私は幸せだった」

ユウ「え?」

ケン「もうお別れなんだ」

ユウ「どうして?」

ケン「(祭壇を見つめる)」

祭壇の健三の遺影を見つめるユウ。

ユウ「健三さん、あなた…」

ケン「ありがとう、本当にありがとう」

ユウ「…」

手と手を握り合うケンとユウ。

ケン「身体に気をつけて」

ユウ「(うなづく)」

握り合った手を静かにはずすケン。

ケン「(うなづく)」

ユウ「あなたに会えて幸せなのは私の方です」

ケン「ユウ…」

ユウ「また会えますね」

ケン「ああ、生まれ変わってもまたユウのところへ行くから」

ユウ「きつとですよ」

ケン「(うなずく)」  
ユウ「(涙をこらえる)」  
ケン「(使者に)ありがとうございます」  
使者「(涙ぐんでいる)では、参りましょう」  
ユウ「健三さん!」  
ケン「ユウ!」

ケンと使者が静かに消える。

ユウ「健三さん、ありがとうございます!」

泣き崩れるユウ。

りえがやって来る。

りえ「お母さんやっぱりその服……」  
ユウ「(泣いている)」  
りえ「(驚く)ど、どうしたのお母さん?」  
ユウ「健三さん、健三さん」  
りえ「大丈夫お母さん?」  
ユウ「健三さんが死んじゃったあ!」  
りえ「わかるの?」  
ユウ「(泣きじゃくる)」  
りえ「兄さん、姉さんちよつと来て、早く!」

研一と浩美がやって来る。

浩美「どうしたの?」  
りえ「お母さんが、お母さんが……」  
研一「お袋どうしたんだ?」  
ユウ「……」  
りえ「お母さんが健三さんが死んじゃったって」  
研一「本当か」  
りえ「うん」  
浩美「母さんわかるの?」

パタッと泣きやむユウ。

立ち上がって返事もせず出て行くユウ。

浩美「なんだ驚かせないでよ」  
りえ「本当なんだって、本当に健三さんがって」

研一「疲れてるんだよ、りえは……」  
りえ「ウソじゃないってば」

浩美「はいはい、分かった分かった」  
りえ「(口を尖らす)」

浩美「(祭壇を見て)あら？」

祭壇から手紙をとる浩美。

浩美「何かしらコレ？」

研一「手紙？」

浩美「(差出人を見て驚く)父さんからだ」

研一「りえ「えっ!?!」」

りえ「なんて書いてあるの、姉さん読んでよ」

浩美「う、うん……」

手紙の封を切って読み始める浩美。

浩美「研一・浩美・りえへ……お元気ですか、天気はいいですか、庭の金木犀は今日もいい匂いをさせていますか。最初で最後の手紙だから何かいいことを書こうと思っただけどなかなか出てきません。君たちに言いたい事は唯一つ今まで本当にありがとう、君たちのおかげで幸せな人生が送れました、君たちが私たちの元に生まれてきてくれて本当に感謝していますありがとう。研一……お前は一番お兄ちゃんだから皆のこと頼むよ。」

研一「(泣き笑い)お兄ちゃんって、いくつだと思ってるんだよ」

浩美「浩美……口は悪いが心は誰よりも優しいこと、父さんはよく知ってる。純一君を放すんじゃないぞ……なに言ってるのよ」

涙する浩美から手紙を受け取る研一。

研一「りえ……たとえ私の死に目に会えなくても後悔はしないでくれ」

浩美「凄い、お見通しね」

研一「お前がお父さんやお母さんを大切に思っていてくれることよくわかってるから、お母さんを頼むよ」

りえ「……お父さん」

浩美「でもこの手紙誰がおいたんだろう……」

研一「昨日の晩はなかったよな」

りえ「……ケンケン？」

研一「ん？」

浩美「なに？」

研一「追伸……干し柿うまかった、干し柿は旭屋が一番！」  
りえ「?!」

浩美「なにそれ？」

研一「さあ……いつこの手紙を書いたか知らないけど意識朦朧として  
たんじやないのかな」

浩美「父さん……」

研一「親父……」

りえ「お父さん」

健三に遺影を見つめ手を合わせる兄妹。

健三の遺影に明かり。

暗転9。

### エピローグ

健三が一人座っている。

健三「という具合に私のロスタイムは終わりました……」

使者とケンがやって来る。

使者「いやぁ大変お待たせいたしました」

健三「いえどういたしまして(ケンに)ご苦労様でした」

ケン「いいえ」

使者「では参りましょう」

片隅にユウが浮かび上がる。

そこへりえがやって来る。

りえ「お母さん、そろそろ始まるよ」

ユウ「写真を見ている」

りえ「なに見ているの？」

ユウ「うふふふ……」

写真(逆向き)を覗き込むりえ。

りえ「わぁきれい、コレお母さん？」

ユウの後ろに回り写真(正面)を覗き込むりえ。

りえ「結婚式の写真ね……(顔色が変わる)」

ユウ「(微笑む)」

りえ「(驚き)ケンケン!？」

ユウ「健三さん」

何も考えられず、その場に座り込んでしまいうりえ。

りえ「(クスツと笑う)」

写真を手提げ袋に仕舞うユウ。

りえ「(大きな声で笑う)干し柿うまかったか……(再び笑う)」

空を見上げるりえ。

りえ「さよならケンケン……ありがとう」

健三「済みません、なんだかばれてしまったようで……」

使者「(咳払い)ロスタイム後のことまで感知いたしておりませんで」

健三「それはどうも」

立ち去る使者・ケン。

ユウ「ふと健三のほうを見るユウ」

健三「何かを感じ振り向く」

見つめあう健三とユウ。

健三「(うなづく)」

ユウ「(微笑みうなづく)」

# 幕